

プロジェクト名： コーパス分析に基づく言語の定量的な意味分析モデルの構築

プロジェクト代表者： 大谷直輝（英語教育開発センター・助教）

1. 研究の背景

近年、コンピューターの発展に伴い、電子化された言語データが大量に蓄積されており、これらのデータを用いて定量的な言語分析を行うコーパス言語学が発展している。このデータ面の急速な整備により、言語学では再編が進んでおり、従来は、学際的な研究が少なかった、機能的言語学の諸分野（認知言語学、談話機能言語学、会話分析、社会言語学など）が、実際に発話されたデータ（＝実例）に基づいた用法基盤の分析を行うという点で統合してきている。しかし、データの充実に対して、大量のデータを客観的に分析するための方法論は進展が遅れている。多くの研究では、伝統的な定量的分析手法である、語句の頻度や表層的な分布に基づく論証がなされており、言語の意味や談話的基盤を論じた定量的研究は少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の二点である。第一に、文脈の統語的・意味的・談話的情報のコーディングに基づく、定量的な分析手法を提案することで、方法論の観点から、機能的な言語学の学際的な研究の発展に貢献することである。特に、従来は分析手法が主観的であると批判されてきた認知言語学や談話機能言語学に対し、反証可能な言語分析モデルを供給する。第二に、実際に、定量的な言語分析モデルを用いて、言語使用の場で揺れ動く言語の動的な側面に関わる現象を論じることである。特に、談話的な機能を持つ構文や反義語や類義語間に見られる非対称的な意味拡張を考察する。

3. 研究の内容と成果

[1] 定量的な分析手法を用いた構文研究（研究業績 [1]）

構文が生起する文脈の、統語的・意味的・談話的情報をコーディングすることで、2 種類の *aside* 構文（懸垂分詞タイプと後置詞タイプ）が持つ談話的な機能を定量的に分析した。従来の定量的な研究は、頻度や表層分布といった形式的な特徴に基づいているが、本研究では意味的な情報や談話的な情報をコーディングすることで、意味と形式の両面から定量的に言語現象の分析を行った。

[2] 新しい方法論への挑戦（研究業績 [2],[3]）

カリフォルニア大学の Stefan Th. Gries 教授と共に、Gries 教授が考案した定量的分析手法（Behavioral Profile）を用いて、多義性、反義性、類義性などの基本的な語彙関係を論じた。本研究では、500 以上の文脈的な特性をコーディングしたデータを基にして、クラスター分析や *snake plots* をはじめとした多変量解析を用いることで、発話された語句の振る舞いを定量的に論じた。

[3] 定量的な分析モデルの日本語への応用（研究業績 [6],[7]）

これまで主に英語の現象を分析してきた定量的な分析モデルを、日本語の分析へ応用した。具体的には、人間を指し示す人称詞の「こいつ、そいつ、あいつ」における指示対象の非対

称的な広がり を考察対象として、「こいつ」「そいつ」は人間以外に抽象物や事態などを指すのに対して、「あいつ」の指示対象は人間に限られていることを定量的に示した。

[4] 定量的分析モデルの普及に向けて (研究業績 [5])

李・中本・黒田 (編) の『認知言語学研究法入門』で、申請者が用いた定量的な分析モデルを、コーパスを用いた研究方法の一つとして紹介した。ここでは、初学者を対象に、特別なコンピューターの技術がなくとも、Excel のみで行える定量的な意味研究を紹介した。

[5] 不変化詞の認知的・談話的基盤 (研究業績 [4])

言語の構造を動機づける、認知的基盤と談話的基盤に注目して、英語の不変化詞の文法特性と意味特性 (心的態度、指向性) を論じた。この研究では、非対称性、心的態度、文法化などの現象を、用法基盤モデルの理論である認知言語学と談話機能言語学を統合した観点から論じた。

4. 今後の展望

2009 年度に行った定量的な意味記述に引き続き、今後も、認知的な機能主義の観点から言語現象を分析する。特に、以下の 2 点に注目する。第一に、定量的な言語研究の方法論を改良することで、用法基盤の言語学が共通して使える定量的な分析方法を提唱する。第二に、談話レベルで一定の機能を持つ構文を考察することで、言語の構造を動機づける様々な基盤を分析する。最終的には、このような課題に取り組むことで、認知言語学、談話機能言語学、コーパス言語学、社会言語学、会話分析などの研究者が共通して取り組める、言語研究の場を模索していきたい。

5. 研究の成果

- [1] Otani, Naoki 2010. "The discourse function of the *aside* constructions: from a cognitive and discourse-functional perspective," 223-243. In Fey Perrill, Vera Tobin and Mark Turner (eds.) *Meaning, Form, and Body*. Stanford: CSLI Publications.
- [2] Gries, Stefan Th. and Naoki Otani 2010 "Behavioral profiles: a corpus-based perspective on synonymy and antonymy," 121-150. *ICAME Journal*.
- [3] Otani, Naoki and Stefan Th. Gries "Behavioral profiles: a corpus-based perspective on synonymy and antonymy," ICAME 30, University of Lancaster, 28 May 2009.
- [4] 大谷直輝 2009. 「不変化詞の主観的意味について: 有界性と価値付与の観点から」 山梨正明、他 3 名 (編) 『認知言語学論考』 8: 191-226 東京: ひつじ書房.
- [5] 大谷直輝 (印刷中) 「BNC に基づく言語研究」 中本敬子・李在鎬・黒田航 (編) 『認知言語学研究法入門』 東京: ひつじ書房
- [6] 大谷直輝・小川典子・澤田淳 2009. 「日本語の人称詞における指示対象の移行についてー「こいつ」、「そいつ」、「あいつ」を例にしてー」 日本言語学会(139 回)、神戸大学、2009 年 11 月 28-29 日
- [7] 小川典子・澤田淳・大谷直輝. 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」 関西言語学会(35 回)、京都外国語大学、2010 年 6 月 26-27 日 (発表予定)